名称未設定-2.pdf　2012/01/12　11:48:19

IBULIVE いぶりぶ

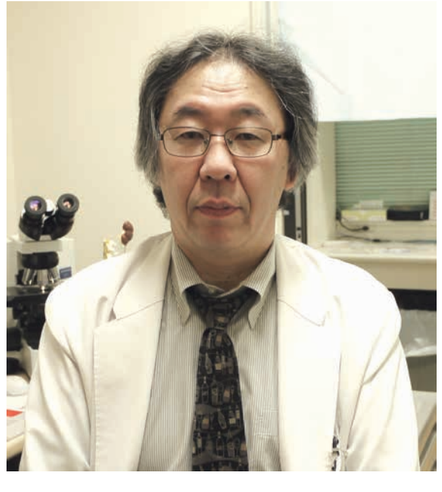
いぶり+Live

医療法人 社団 いぶり腎泌尿器科クリニック 泌尿器科・血液透析 広報誌

新年号 NO.20 季刊誌

坪院長の健康講座 「泌尿器科手術」いまむかし

院長 坪　俊輔



明けましておめでとうございます。本年も役職員一同、一致協力して努力する所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

さて、ふと気付くと、私が泌尿器科医になってから既に30年以上にもなっていました。今回は、私が新人だった昭和55年頃の泌尿器科の治療、特に手術方法を思い起こし、当時と比べ今どれ位変わったのか、進歩したのかについて書いてみました。

高齢男性の排尿障害の一番の原因である、前立腺肥大症に対する手術方法ですが、現在ごく一般的に行われている経尿道的切除（TUR－P）が、当時はまだやっと普及した頃で、症例については開腹による前立腺核出術もまだ行われていました。（勿論TUR－Pの方が手術侵襲が少なく、術後も楽に経過します）。

なお、最近では前立腺肥大症に対する薬物治療が非常に効果的で、相対的に手術適応が減っている印象です。ちなみに悪性の前立腺癌に対する治療は、当時内分泌療法（抗男性ホルモン療法）が殆どで、現在一般的に行われている限局性前立腺癌に対する根治的前立腺摘出術が普及してくるのは、平成に入ってからでした。

泌尿器科日常診療で多く出会う尿路結石に対する手術方法も大きく変化・進歩しました。当時、膀胱結石は内視鏡で摘出できましたが、それ以外は開腹手術が普通でした。手術侵襲の違いもさることながら、尿路結石は再発率が50％といわれ、開腹での再手術は非常に難しかったように記憶しております。

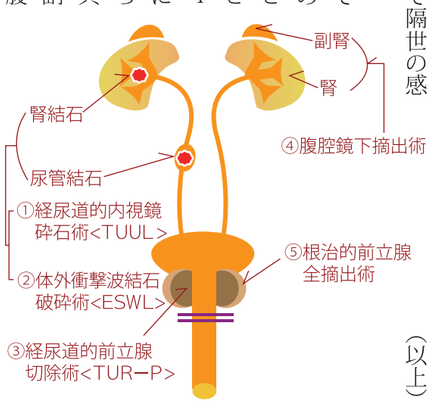
現在行われている上部尿路結石に対する内視鏡手術（TUUL）や体外衝撃波結石破砕（ESWL）が本格的に進歩・普及していったのは平成に入ってからです。

現在の手術方法が低侵襲なのは勿論ですが、結石の再発症例でも繰り返し同様の治療が可能な事も大きな利点だと思われます。昭和55年当時、膀胱癌などで膀胱摘出した後の尿路変更はストーマを作成し集尿袋を装着するのが普通でした。しかし今では、症例により腸管を利用して代用膀胱を作成し、術前とあまり変わらない生活が送れる場合もあり、一泌尿器科医として隔世の感を覚えます。

ただ何と言っても「腹腔鏡手術」の出現が一番の驚きです。お腹を大きく切らず、3～4本の管を腹腔内に入れて、そこから内視鏡や手術器具を入れて腎臓や副腎を摘出する「腹腔鏡手術」の出現・進歩は当時予想だにしませんでした。実際に症例を経験すると、手術侵襲・術後疼痛などが少なく、手術後の回復が非常に速いようです。勿論総ての症例で腹腔鏡手術が可能なわけではありませんが、少しでも適応が広がればいいと思っています。

いずれにしても、昔と比べ手術療法だけではなく、抗腫瘍剤を含め各種薬物療法の進歩にも目を見張るものがあり、個々の症例に応じ患者様と充分相談して、最も適した治療法を総合的に選択していくことが大切だと考えています。

（以上）



手術に伴う傷以外、心にも身体にも傷を付けない

手術室看護師長　坪　美幸

私たちの職場である当院の手術室では、手術や検査を受けるために、年間250人前後の患者様をお迎えしております。

外来受診の結果、医師から手術の必要性を説明され入院された患者様は、病棟医師から行われる手術について、詳しい説明を受けます。病棟看護師からも手術準備や入院中のスケジュールをお話ししますが、手術室内での詳しい説明をするために、手術室看護師が「術前訪問」に伺います。

「術前訪問」とは、手術に向かう患者様の緊張を少しでも和らげるために、手術室内で行われることを事前に説明させていただくとともに、顔見知りになることで「誰も知らない中で」という心理的な圧迫感を軽減し、見知った人がそばにいる心強さと安心感を持っていただくことを目的としています。

手術を終えた患者様からは、「手術前に色々教えてもらったから、不安はなかったよ」と声を掛けていただくことがあり、役立っていることを嬉しく感じることもあります。

「術前訪問」の目的はそればかりではなく、「寒さが苦手」「腰痛がある」など、様々な情報を事前に得ることで、「室温をいつもより高くし、温水マットを敷こう」「ゲル状マットを使って、腰への衝撃を少なくしよう」など、患者様一人ひとりに適確な対応を取るためでもあります。

私たちは患者様に対して、「手術に伴う傷以外、心にも身体にも傷を付けない」というスローガンがあります。これを達成するためにも、「術前訪問」ではより多くの情報を感じ取り、患者様が手術そのもの以外のことで、我慢することがない看護を、提供していきたいと思います。

11月10日実施 防火訓練 本番さながら！真剣訓練！

防火訓練が昨年11月10日に実施されました。3.11東日本大震災後初の訓練となったこの日は、夜間の火災を想定、2階病棟と3階透析室からの避難誘導、自力避難が困難な患者様の介助を本番さながらの緊張感で行いました。

患者様の避難介助で、慎重に階段を降りるスタッフ

ほぼ全職員を対象に実施された訓練では、避難経路や指示系統、役割分担など細部にわたり確認、問題点をチェックし、各職場間でもこの結果を共有し、災害に備えます。

いざという時は、やり直しが許されず、人命に関わる災害に発展する場合も多く、常日頃の心構えが重要となり、訓練で得た体験は非常時に大きな力となります。当院は2階病棟が19床、3階透析室は40床のベッド数があり、いかに迅速に避難するかが、最大のポイントになります。

訓練終了後は、横井事務長が講評し、発生から避難完了までを総括、対応をしっかり認識し、訓練を終了しました。

■発行：いぶりぶ発行委員会

伊達市梅本町2番地15いぶり腎泌尿器科クリニック内 TEL0142-21-1400 FAX0142-21-1401

●発行責任者：横井　浩

■発行/平成24年1月10日■4月・7月・10月・1月の年4回発行

※本誌掲載の写真、記事の無断転用は固くお断り致します。

●企画・制作：室蘭民報社

室蘭市本町1-3-16　電話0143-22-5122

職場紹介 頑張ってます 第3回 透析室看護編

人工透析を担う地域の中核施設として定着

最高の治療環境提供を目指して

3階の透析室＝写真＝は院内で最大のフロア面積を誇り、ベッド数40床は西胆振で最大、胆振管内でもトップクラスの人工透析施設です。開院以来、地域の中核施設として、その使命を担ってきました。スタッフは看護師17人、臨床工学技士6人、看護助手6人、合わせて29人の大所帯です。今貴恵子看護師長指導の下、最高の治療環境と、看護の提供を目指し、高い意識で業務に臨んでいます。

勤務体制は曜日ごとに3部と2部体制を交互に敷き、夜間透析など、患者様のニーズに応えています。現在通院されている方は約130人、それぞれが週3回の治療なので、延で1500人以上の方々が毎月利用されています。

専門性が要求される職場

透析看護は機器の操作を伴うなど、極めて高い専門知識と技術が要求されます。小さな失敗も、当然人命に関わる重大なミスにつながるため、正確な操作技術が要求されます。

看護スタッフは開院当初からのメンバーも多く、ほぼ透析看護専門、といっていいほどのベテランがそろいます。中には経験が浅いスタッフもいますが、阿うんの呼吸で周りがカバーする、キャリアの力がそこを埋めています。

看護師同士はもちろんのこと、臨床工学技士との連携といった、チームワークも重要なポイントになるのが、透析看護の特徴でもあります。仕事はチームで行われるので、意思疎通は重要で、普段から互いの個性などを理解しあうため、日常のコミュニケーションが大切になります。

患者様への細やかな配慮

透析治療は週3回必要となり、所要時間は概ね半日を要します。患者様一人ひとりへのご負担は、相当なものがあり、与えるストレスを、いかに軽減するかも大切な仕事になります。

患者様は近隣の市町村からが主体ですが、遠くは長万部町、真狩村などから通院する方もおり、移動だけでも大変です。こちらの不手際や言葉づかい、対応で不快感を与えないよう、細心の注意を払っています。

患者様は高齢の方も多く、体調の変化に注意しながらの看護は鉄則です。必要以上に我慢される方もいるので、普段との違いを見逃さないよう、細かな配慮に努めています。

坪院長が唱える「医療はサービス業」の基本理念をよく理解し、患者様本意の看護を追及し、利用される皆様の満足度を向上させていきたいと考えます。お気づきの点などございましたら、ご遠慮なくスタッフに申しつけ下さい。

仲山副院長が「性の講話」

市内の中学校 高校各校で講演

当クリニックの仲山明宏副院長＝写真＝が伊達光陵中、伊達中、伊達緑丘高の各校で開かれた「性の講話」で講師を務めました。いずれも男子生徒を対象に、「思いやり」や「優しさ」「責任」について話し、正しい知識に基づいた責任ある行動と、自覚を促しました。

このうち、昨年12月16日に開かれた伊達中学校（島崎由裕校長）の講話では、男子生徒88人を対象に、インターネットなどで伝わる、間違った情報に触れ、惑わされることのないよう注意しました。

この中で仲山副院長は、誤った知識により、主に若年層の間で性感染症が広がっている現実や怖さを、分かり易く訴えました。

さらに、「性感染症はパートナーを傷つけ、場合によっては命を奪う」と、避妊具を使わない性行為の危険性を強調、時代感覚を直視した内容で指導しました。

思春期のデリケートな話題を、視点をそらすことなく、正面から切り込み熱く説いて行く内容は、各校で聴講した生徒の関心を呼びました。

同副院長は「思いやりとは本能、感情をコントロールすること」と説き、身勝手な行動を抑え、「思いやりのある大人に」と心身の成長を呼びかけ、講演を締めくくりました。

接遇研修を実施

患者様への接客マナー向上のため、接遇研修会＝写真＝を昨年12月15日、実施しました。講師は三井住友海上火災保険㈱・経営サポートセンターの古山直子さん。スタッフ48人が参加し、接客の基本を学びました。

研修は「選ばれる病院を目指す」を目標に、クレームの未然防止、苦情対応の実際などが示され、スキルアップを図りました。研修最後には、患者様の満足度アップのため、サービス目標を参加者全員が定め、日常業務への導入を図り、接客マナーへの意識を高めていくことを確認し合いました。

column コラム 待合室 No.20

壮大な夢の継承を

○…最近、吹奏楽演奏会を紹介する新聞記事の中で、「管弦楽の響き」という表現を見た。吹奏楽とは管楽器による合奏であり基本的に弦楽器は含まないので、この表現は間違いである。印刷されるまで、複数の編集者がチェックする訳で、誰も気付かずに活字になってしまった！　ということだろう。

○…吹奏楽に関して、この種の間違いが結構多い。以前には、バイオリンやチェロなど、あり得ない楽器が登場した記事も読んだことがある。国内の吹奏楽人口は、小学生から社会人まで500万人以上といわれ、結構なボリュームである。その割には一般の理解が薄く、基本的な間違いや誤解の原因となっているようだ。

○…以前、道内企業の100周年記念誌、編集のお手伝いをしたことがある。整理していた膨大な記録写真のなかから、同社の部活と思われる吹奏楽団の写真が1枚だけ出てきた。ある程度年代別に分類されていたことから、大正年間のものと思われた。姉妹会社であった別の企業に、日本でも草分けといわれる吹奏楽団が現在もあり、写真の楽団はその前身であったようだ。

○…80年以上も前に、北海道に吹奏楽団があったことは大発見といえる。大正時代の本道で管楽器をそろえ、指導者を招き、活動を軌道にのせることは、並大抵のことではない。英国の資本も注入された企業だけに、イギリスで盛んな「金管バンド」と思われたが、写真にはクラリネットなど木管楽器も写っており、間違いなく今でいう吹奏楽団である。

○…戦後から始まった「全日本吹奏楽コンクール」が火付け役となり、吹奏楽は覚醒的に発展してきた。構図的には音楽にスポーツの「勝敗」に似た、スリルと興奮が加わり、中学、高校のスクールバンドを中心に広まった。一方、風土とのつながりといった、芸術や教育には欠かせない地域性や個性が、コンクールに偏った活動により損なわれる、閉鎖性という影響も問題視されている。

○…大正期に、まだまだ辺境の地であった本道で、吹奏楽を開花させた先人の熱き思いには、どういった「壮大な夢」が秘められていたのだろう。道内で吹奏楽を志す若者には、コンクールの舞台、狭い枠の中ではなく、この北海道の広い大地で育ってほしい。小さな枠の中に納まることなく、「壮大な夢」を、確実に引き継いでほしい。音楽に勝ち負けはない。

透析室で忘年会 楽しい時間過ごす

毎年恒例となり、今回で7回目の「透析室忘年会」が12月11日、市内のホテルローヤルで行われました。同忘年会には患者様はじめ、クリニックスタッフも参加、合わせて49人が、2011年を振り返りました。

あいさつする今師長

今看護師長のあいさつで幕開けした忘年会は、次々と運ばれる料理に舌鼓を打ちながら、カラオケやゲームも楽しむなど、交流を深めあいました。

この会を楽しみにする患者様も多く、終始なごやかな雰囲気が会場を包んでいました。締めは例年通り坪院長が務め、新しい年の平穏を願いお開きとなりました。